



見つける。つなぐ。
「人間って信じられる」という懸け橋をつくる。
人ごとではなく自分のこととして行動することで何かが変わる。



大阪子どもの貧困アクショングループ 代表
徳丸ゆき子さん

聞き手 太田美由紀 (ライター)

大阪市北区天満の「母子変死事件」が日本中に衝撃を与えたのは2013 (平成25) 年5月24日。この事件を受け、その翌日、「悲劇を繰り返さないよういままずぐ行動を！」と立ち上がった団体が、大阪子どもの貧困アクショングループだ。社会的弱者である子どもたちとその親の置かれている状況について、また、子どもの生活や命を守るためにできることについて、徳丸ゆき子さんにお話をうかがった。

自分自身が困っている子どもだった

徳丸さんが子どもをサポートに関心を寄せるきっかけにはどんなことがあったのでしょうか。

徳丸 私自身の子どもの時代にさかのぼりますが、幼稚園、小学校、中学校、高校と所属はしていたものの、人がいっぱいいるのも、みんなと合わせていろいろなことをやらされるのも嫌でした。「行きたくない。なんで行かなあかんねん」といって親を困らせてい

たようです。今でいう不登校児でした。勉強は好きだったんですけどね。

学校に行ったり行かなかったりを繰り返していました。おなかが痛いと言ったり朝だけやり過ごせばこっちのものから。近所にある鎮守の森のようなどころに行ったり、本を読んだり、川でメダカを捕ったりしていました。自然の中に行くと、友達がいなくてもちっとも寂しくありませんでした。

一番行きたくなかったのは小学校6年生のころですが、近所にあった科学教室のようなどころは楽しくて、学校は休んでもそこには通っていました。

PROFILE ●とくまる・ゆきこ●

1970年、大阪府生まれ。渡英し、現地で語学学校、大学に進学、心理学を学ぶ。帰国後、NPOにて不登校、ひきこもり支援に従事。2003年から10年間、国際協力NGO (現・公益社団法人) セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンに所属。子どもの社会参画、子どもの貧困、東北大震災緊急復興支援のスタッフを経て、13年5月25日に大阪子どもの貧困アクショングループを設立。8歳の息子を持つシングルマザー。

その先生に、もうちょっとうまいことやらなあかんあと言われて勉強はしてしまいましたね。その後はいわゆる学習塾も行きましたし、高校にも進学しましたが、非常に厳しい学校なのに、学校の先生にすぐく反抗しまして、「内申書なんて書いてやらない」とまで言われました。そんなこんなで、大人が嫌いでしたよね。

イギリスで見つけた 自分のポジティブな面

徳丸 高校卒業後、伯母が仕事でイギリスに住んでいたのですが、とりあえず何のあてもなく渡英しました。それまでずっと日本では変わってるとか協調性がないと言われ続けていましたが、伯母が暮らしていたシェアハウスにアーティストやミュージシャンが住んでいて、「ゆき子はちゃんとしてるね」「ゆき子を変えたという日本が変だ」「変じゃなくてユニークなんだよ」と声をかけてくれた。自分のことがポジティブにリフレミングされました。

—そこでさらに意欲も湧いてきたので
—しょうか。

徳丸 そうですよ。語学でも勉強しようかと語学学校に通い始め、それまで自分が変だと言われることが多かつ



たので、現地の大学に入学して心理学を専攻し、アートセラピーなどを学びました。住んでいた南ロンドンのブリクストンは、アフリカ系やジャマイカ系の移民が多く、日本人はほかに見当たりませんでした。暴動などもありましたし、怖い思いも何度もしました。日本人は、穏やかでほんとはいい人だなのかもしれないと外に出てみると分かりましたし、日本人が就職するのも当時のイギリスでは難しそうでした。

阪でセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンの仕事を見つけたんです。セーブ・ザ・チルドレンは子どもの権利の擁護団体で、イギリスの本部でボランティアをしていたので親しみがありません。千葉での活動を通して、ひきこもっている子どもたちは、教育の権利を侵害されているんじゃないかという気があり、仕事をしながら子どもの権利について学びたいという思いもありました。その後、約10年間、国内の子どもの社会参画や子どもの貧困、東北支援にも携わりました。

—子どもの貧困に関してはその当時からですね。

徳丸 もし私に何かできるとしたら子どものことだという思いをずっと持っていました。自分自身が子ども時代、とてもしんどかったんです。本当に死ぬのうと思つたこともありましたが、自

分の声を聞いてもらえなかったという思いもあります。「黙って学校に行きなさい」「先生の言うことを聞きなさい」と大人たちに言われるだけでした。だからこそ、子どもたちの声を聞き、子どもたちに必要なサポートをしたい。それは一生やっていきたい。そのテーマは何かを探っていたんです。

明確になつてきたのはリーマンショック後です。日本の経済状況が確実に悪化していく中で、子どもの貧困が子どものあらゆる幸せや権利を奪っていくと気づきました。この一番大変なことを解決せずに、子どものことに携わるとはいえないだろう、私のアプローチはまずそこからだと思います。

セーブ・ザ・チルドレンで企画を出して2010年に事業化し、京阪神の小中高生100人に聞き取り調査を始めました。子どもたちにどれくらい貧困が忍び寄っているかの調査です。調

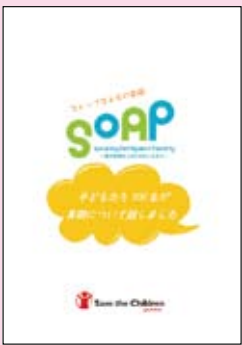
帰国後は、東京の会社に就職して働きながら、NPOでも活動を始めました。それがいまの私のアウトリーチにつながっています。家に閉じこもっている不登校やひきこもりの子に、根気よくきつかけづくりのアプローチをする訪問事業です。

活動を続けていくうちに、10年以上ひきこもっているような、自分より年上の人のサポートなどを担当するようになり、訪問しても何の反応もないことが続きました。このままではバーンアウトしてしまうのではないかと危機感も持っていたんです。そんなとき、大阪で暮らす母が乳がんになり、それを機に大阪に戻って、母の看病と、母が面倒を見ていた祖母の世話をすることにになりました。

私の声を聞いてほしかった その思いが背中を押す

徳丸 母の体調も落ち着いたころ、大

査開始を目前にした2010（平成22）年7月に大阪市西区で大阪2児放置死事件があり、さらに急がなければならぬと思いました。調査は11（平成23）年2月末に終了し、これからレポートにまとめるところで東日本大震災が起こりました。私も1年間調査をなんとかまとめ、現在もセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのホームページに「子どもたち100名が貧困について話しました」レポートとしてダウ



「子どもたち100名が貧困について話しました」レポート（セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのホームページよりPDFをダウンロードできる）

大阪における母子の象徴的な2つの事件

2010年7月30日

大阪市西区 【2児放置死事件】

この日、異臭通報を受けた警察により3歳の姉と1歳の弟が遺体で見つかり、風俗店従業員の母親（当時23歳）が逮捕された。ふたりは6月下旬に死亡したと見られている。2012年、大阪地裁は、扉に粘着テープを貼るなどの行為から殺意があったと認め、母親に懲役30年の判決を言い渡した。最高裁は13年3月に上告を棄却し、刑が確定。背景には母親の複雑な生い立ちがあった。

2013年5月24日

大阪市北区 【母子変死事件】

大阪市北区天満のワンルームマンションで、母（28歳）と男児（3歳）の遺体が見つかった。死後約4カ月で腐敗しており、死因は不明。部屋に冷蔵庫はなく、食べ物や現金も見当たらず、電気やガスは止められていた。預金も十数万円だった。2012年10月ごろまで大阪府守口市にいたが、夫が家を離れた後、母親は飲料品配達や飲食店員を経て、大阪・北新地のクラブで働いた。この間、生活保護の相談をしていたほか、親族に支援を求めてもいたという。

行動しながら考える ダメなら一歩引けばいい

—大阪子どもの貧困アクシヨングループ設立の経緯を教えてください。

ンロードできるようになっています。

徳丸 東北の支援をしながらも、私は

ずっと子どもの貧困に取り組みたかったんです。日本ではストリートチルドレンではなく子どもたちは親の庇護下にいます。親の中でも母子世帯のうち66%が貧困世帯です（阿部彩『子どもの貧困』（岩波新書））。私もシングルマザーで、明日はわが身ですし、大阪2児放置死事件でも、私がおもしろければそういう状況になってもおかしくありません。だからこそ、一番しんどい親元にいる子どもたちから切り込もうと考えていました。2012（平成24）年6月にセーブ・ザ・チルドレンを辞めて、一番効率がいい方法を考え、

いろいろな団体にリサーチしたり、東京で始めたほうがよいかと検討したりしていました。

13年（平成25）5月24日、北区天満の母子変死事件がおきました。本当にショックでした。行動せずにうだうだしている間にこんな事件がおきてしまった。それをフェイスブックでつぶやいたら、もと職場の先輩、同僚、後輩、ボランティア、子ども支援関係者から、

翌日、チャイルド・ポバティ・アクション大阪（CPAO/シーパオ）、大阪子どもの貧困アクシヨングループとして動き出しました。

この団体の活動に専念しているのは現在私だけで、あとは仕事を持ちながらスタッフとして活動しています。社会福祉士、ケースワーカー、カウンセラー、学童保育指導員など子ども支援関係者のほかに、イラストレーター、カフェ経営者、ファイナンシャルプランナー、会社経営者、会社員など中心メンバーは幅広く、現在14人です。

毎月の勉強会やアウトリーチでは、初めて来られる人、遠方から来られる人もいて、西区の事件で心を痛めている人の多さを感じます。「何ができるか分からないけど力になりたい」という人たちの受け皿にもなり、力を合わせてできることをできるだけ早く行動に移す。自分一人じゃ何もできないけれど、集まればなんとかなるものです。



「うだうだ言ってるやらなあかんのちゃう？」とコメントがたくさん寄せられました。その日の夜はみんなとスカイプやラインでやり取りしました。「何ができるだろう」「彼女にどういう支援があれば防げただろう」「やつぱりアウトリーチ（こちらから出向いてつながる）だよね」「待つてもあかん」「探し出さないと、向こうから来てくれるわけではない」

最近では遠方から、マニュアルを教えてくださいとか、教えにきてほしいというお話もいただきますが、私たちも手探りで、がむしゃらにやっているだけです。何かやりたいという人はまず何でもいいから行動に移してほしい。あなたの近くでも、しんどい人は絶対にいるはず。勇気がいりますがその人に「どうしたの？」と声をかけたり、もっと積極的にお節介をしていくしかないと考えています。怒られたら一歩引いて、どうしたらいいだろうと考える。私たちはその連続で行動しています。

崖の上で待つのではなく 下まで降りて伴走する

—「まずアウトリーチから」という発想はどこから得ましたか。

徳丸 10（平成22）年の大阪2児放置死事件の裁判記録を読むと、最後に専

※以下、ホームページより抜粋

主な活動

- **アウトリーチ** / 月に一度、天神橋筋商店街を起点として、メッセージカードを配布しながら街の方と声を交わし、つながりを探す活動。
- **勉強会** / 活動紹介、参加者のネットワークづくりを行う参加型のワークショップも行い、当団体の今後の活動への意見を集める。
- **調査** / シングルマザー 100人のヒアリング調査を行う。年内に報告書をまとめ、政策提言もする予定。
- **お寺おやつクラブ** / 虚空山彼岸寺と協力し、お供えされるお菓子や果物などを困っている家庭へ「おやつ」として届ける。
- **シーパオ子どものいばしょ** / 子どもたちと工作や遠足、夏にはキャンプも企画。お母さんには子どもと離れ、ゆっくりする時間を。
- **スタ☆ママ** / 起業に関心のあるシングルマザーを育成するプロジェクト。先輩女性起業家と共に、成功確率を上げながら起業を目指す。

上記以外にも、活動を通して新しい企画が次々に生まれ、実行に移されている。会員・寄付も随時受付中。

ホームページ▶ <http://cpao0524.org>
問合せ▶ info@cpao0524.org

私たちは見えにくい子どもの貧困を明らかにするために、子どもや家庭の生活を調査し、そこから子ども・親・周りのおとなをサポートしていきます。

大阪子どもの貧困アクショングループは、いま日本で何が起きているのか？

メディアでは“虐待死”が取り上げられ母親が責められる。

本当に母親がだけ悪いのか？

どうしたら解決にむかうのか？

その実態を把握するため

“困っていた”、“困っている”シングルマザーを対象に調査を行い、よりニーズにあった事業を行います。

子どもの貧困とは…

日本の子ども（17歳以下の子ども）の貧困率は15.7%（2009年）に達し、1986年の調査開始以来、最も高い。ユニセフ（国連児童基金）の報告でも、日本は先進35カ国中9番目に高い水準である。貧困率とは、家庭の所得が、その国の標準的所得の半分以下になる世帯の割合を指す。

アウトリーチに同行取材！

日本一長い天神橋筋商店街を中心にアウトリーチ。この日は大阪市北区にある天神橋筋六丁目駅に18時に集合。事前申し込み不要で各自が現地に集合し、スタート。



◀今回は新しいリーダーからアウトリーチの説明。初参加の人も。



◀カラフルな髪留めを同封して配布する。(表面/「助けて！」って言ってもええんで。裏面/何か子育てのことで困っていることありませんか〜？ しんどい場合にはまず私たちに話してみませんか？)



◀声の掛け方、渡し方は人それぞれ。「しんどい人がいたら渡してあげてください」「昨年、この近くで母子の事件があったのはご存じですか」



◀配布、情報交換をしながら1時間ほど近辺を歩く。置いてもらっているお店には挨拶と補充も忘れずに。

終了後、食事をしながら自己紹介や質問・振り返り意見交換会を行う。活動を通してさまざまなことを感じ、意見交換は白熱。新たなアイデアや動きを生み出す。

―つなげることは、行政としても一番難しいところです。

徳丸 実際、本当に難しいですね。見

門家のコメントとして「もつとアウトリーチすべきだ」と明記されています。なのになぜ誰もやらないんだろ？と思っていたんです。じゃあまずは天満のお藤元の天神橋筋商店街でアウトリーチしようと、月1回チラシを配るところから始めました。

そこからどんどん活動の幅が広がっていますが、私はずっと変わらず、アウトリーチで見つける、つなげる。ここをやりたい、ここに特化していきたいと思っています。私たちが見つけた人、私たちが見つけて手を伸ばしてくれた人はいろいろな地域にいますので、何を一番必要としているかによって行政、母子寮、民間のシェルター、NPOなどにつないでいきます。

つなげただけつながらない。つながらない人もいます。すでにいろいろなところに相談に行つて、たらい回しになり、つながらうとする気持ちがないなっている場合もありますし、精神疾患、依存傾向があるなど、複雑な問題がからんでいて、スムーズにいくことは少ないですね。

子どもの貧困というと、経済的な問題だけだと理解する人もいますが、貧困といわれる親子は同時にたくさん困りごとを抱えています。それは雪だるま式に大きくなっていることが多く、幼少期から虐待を受け、中学生から一人で生き抜き、結婚後DVを受け、精神疾患になって子どももまだ小さいというお母さんもいます。お金だけでは解決できません。そうになると、サポートの選択肢を伝えるだけではつながらません。まずは私を信じてもらおう、私を通して社会を信じてもらおうところから始めなければなりません。

行政の対応にうんざりしている人も多く、「私もそういう人を知っているけど、そうじゃない人も知っているから負けじと行きましよう」といくら励まして、つなげることはできません。彼女たちにしてみると、行政は崖の上で腕を組んで待っている。下にいる人はケガをして子どもを抱えていても、その崖を登っていかなければならぬ。自分の力だけで這い上がるのは難しい。途中で何度も落ちてさらにケガもひどくなる。ロープをたらしたくらいでは登れません。自分たちが谷底まで降りて、寄り添い励ましながらいかに登っていかなければならぬ状態にある人がたくさんおられ、驚いています。私も始めるまで分からなかったことです。

―そこをどうつなげるか、ですね。

徳丸 見つけるとつなぐの間に、もう



一つクッションが必要です。親子の居場所をつくったり、一緒にキャンプに行ったりしながら、「人や社会って信じられるな」という懸け橋をまずつくらなければならぬ。時間をかけて、複雑に絡まった問題や固くなった心をほぐしてからつなぐということをしていきます。

メンバーもそれぞれが自分の力を生かしてできることを行動に移しています。その結果、見つけるとつなぐの間にたくさん企画ができ、選択肢を広げていきます。シーパオクラブには、お母さんの居場所、子どもの居場所、キャンプなどもあり、ほかにも最近ではスタ☆ママという女性起業家を応援する企画も生まれています。

今では大きな柱のひとつでもある「お寺おやつクラブ」は日本経済新聞を読んだお坊さんからの持ち込み企画です。50近くもお寺を束ねて、廃棄せざるをえなかったお供え物を食料支

援として送料も負担して、各家庭に届けてくださっています。明日食べる物が無いという人から連絡がきても、遠方ですぐに会いに行けない人にも、とにかく食料を届け、スカイプやライン、メールでやりとりをしています。

—これまで、どのくらいの人のサポートを行っていますか。

徳丸 シングルマザー1000人の聞きとり調査を1年かけてやっています。現在、60人に話を聞いて、お寺おやつクラブにつないでいます。また、相談だけでも100件くらいきています。これでこの人が終わったということがないので、安定したかと思ったりがくんと落ちたり、半年後にまた厳しい状態になったりするので、手を離れていくことは少ないのですが、命に関わりそうだという緊急性のある人、そこまでいかないけれど注意が必要な

人、ゆるくつながっている人などさまざまです。

行政の人も、思いはたぶん私と同じだと思うんです。行政だからできることもあれば、民間だからできることもある。行政から連携の話もいただきますが、予算がないということが多い。私たちが霞を食っては生きていけないから、ぜひ予算をとってお話をいただければありがたいですね。

団体発足から1年 これからのシーパオ

—団体の発足から1年を迎えました。これからの展望をお聞かせください。

徳丸 大阪でモデルをつくって他の人たちに展開していつてもらえるようにという思いでスタートしましたが、少しずつ形は見えてきています。これまでの1年間はがむしゃらに活動してきましたが、体制を整えて、私がいなく

ても継続できるような仕組みにしていかなければなりません。アウトリーチ

は費用対効果で見ると効果は高くありませんが、行動を起こしながら、一人一人が何ができるかを考える場でもあるので、今後も続けていきます。また、これからは講演のお話も受けていかなければならないので、講演先でもアウトリーチや勉強会を開催していきたいと考えています。保健師のみなさんにもぜひ勉強会などにお越しいただきたいですね。

—徳丸さん自身の夢や目標は？

徳丸 私の個人的なテーマは子どもと自然です。不登校のころに自然に癒された感覚がありますから、しんどい子どもたちにそういう場を提供したいとも考えています。なかなか連絡がとれず、心を開いてくれなかったお母さんが、無理かなと思つて誘つた畑にふつと来てくれたこともありますし、自然の力は計り知れませんが、都会のほうが好きな人もいますので、もちろん自然だけに限るということではありませんが、自然がたくさんあるところで迎えて、しんどい子どもたちが来てくれるのが理想でしょうか。畑をいじつて、みんな何をするでもなく、それぞれ散策したり寝転んだりして過ごせるような時間をつくりたいですね。

最後になりますが、助けてと言わないう人は、言わないのではなく、社会が言わせないでいるということを見なさんに知っていただきたいと思っています。子どもの貧困を一部の個人の問題

としていては悲劇が繰り返されます。

自分も何かしてみたいと思つている人は、私たち社会の問題として捉え、しんどい状態にある子どもたちに心を寄せることから、少しでも行動に移していっていただきたいです。

1周年記念イベント

「隣人」上映会&トークライブ

1周年記念イベントとして、映画「隣人」の上映と刀川和也監督、映画企画担当 稲塚由美子さん、大阪府子どもの貧困アクショングループ代表 徳丸ゆき子、アクティビスト友岡雅也さんの司会でトークライブを開催します。

- ◆日時：2014年7月27日(日) 13:30～16:30 (13:15開場)
- ◆場所：難波市民学習センター (大阪府大阪市浪速区湊町1-4-1)
- ◆費用：1,000円(資料、茶菓子代)
- ◆定員：100名
- ◆申込み：件名を「CPAO1周年記念イベント参加申し込み」として、お名前・人数・メールアドレスを記載し、info@cpao0524.orgまでメール送付。
- ※映画「隣人」ホームページ <http://www.tonaru-hito.com/>